

# 押絵と旅する男

江戸川乱歩

青空文庫



この話が私の夢か私の一時的狂氣の幻まぼろしでなかったならば、あの押絵おしえと旅をしていた男こそ狂人であつたに相違そういない。だが、夢が時として、どこかこの世界と喰違くいちがつた別の世界を、チラリと覗のぞかせてくれる様ように、又また狂人が、我々の全まったく感じ得ぬ物事を見たり聞いたりすると同じに、これは私が、不可思議な大氣のレンズ仕掛けを通して、一刹いっせつな那、この世の視野の外にある、別の世界のいちちぐう一隅を、ふと隙見すきみしたのであつたかも知れない。

いつとも知れぬ、ある暖かい薄曇つた日のことである。その時、私は態々わざわざ魚津へ蜃氣楼しんきろうを見に出掛けた帰り途みちであつた。私がこの話をすると、時々、お前は魚津なんかへ行つたことはないじ

やないかと、親しい友達に突っ込まれることがある。そう云われ  
て見ると、私は何時の何日に魚津へ行つたのだと、ハツキリ証拠  
を示すことが出来ぬ。それではやっぱり夢であつたのか。だが私  
は嘗て、あのようにな濃厚な色彩を持った夢を見たことがない。夢  
の中の景色は、映画と同じに、全く色彩を伴わぬものであるのに、  
あの折の汽車の中の景色だけは、それもあの毒々しい押絵の画面  
が中心になつて、紫と臙脂の勝た色彩で、まるで蛇の眼の瞳孔  
の様に、生々しく私の記憶に焼ついている。着色映画の夢という  
ものがあるのであろうか。

私はその時、生れて初めて蜃気楼というものを見た。蛤の息の  
中に美しい龍宮城の浮んでいる、あの古風な絵を想像して

いた私は、本物の蜃気楼を見て、  
膏汗あぶらあせのにじむ様な、恐怖に  
近い驚きに撃たれた。

魚津の浜の松並木に豆粒の様な人間がウジャウジャと集まって、  
息を殺して、眼界一杯の大空と海面とを眺めていた。私はあんな  
静かな、唾の様にだまっている海を見たことがない。日本海は荒  
海と思い込んでいた私には、それもひどく意外であった。その海  
は、灰色で、全く小波さざなみ一つなく、無限の彼方かなたにまで打続く沼か  
と思われた。そして、太平洋の海のように、水平線はなくて、海と  
空とは、同じ灰色に溶け合い、厚さの知れぬ靄もやに覆いつくされた  
感じであった。空だとばかり思っていた、上部の靄の中を、案外  
にもそこが海面であって、フワフワと幽霊の様な、大きな白帆しらほが

滑って行ったりした。

蜃気楼とは、乳色ちちいろのフィルムの表面に墨汁ぼくじゆうをたらして、

それが自然にジワジワとにじんで行くのを、途方もなく巨大な映画にして、大空に映し出した様なものであった。

遙かな能登半島の森林が、喰違くいちがった大気の変形レンズを通し

て、すぐ目の前の大空に、焦点のよく合わぬ顕微鏡けんびきようの下の黒い

虫みたいに、曖昧あいまいに、しかも馬鹿馬鹿しく拡大されて、見る者

の頭上におしかぶさって来るのであった。それは、妙な形の黒雲と似ていたけれど、黒雲なればその所在がハッキリ分っているに

反し、蜃気楼は、不思議にも、それと見る者との距離が非常に曖

昧なのだ。遠くの海上に漂う大入道おおにゆうどうの様でもあり、ともすれ

ば、眼前一尺に迫る異形いぎようの靄かと見え、はては、見る者の角かくま膜くの表面に、ポツツリと浮んだ、一点の曇りの様にさえ感じられた。この距離の曖昧さが、蜃気楼に、想像以上の不気味な気遣いめいた感じを与えるのだ。

曖昧な形の、真黒な巨大な三角形が、塔の様に積重なって行ったり、またたく間にくずれたり、横に延びて長い汽車の様に走ったり、それが幾つかにくずれ、立たちなら並ひのきこずえぶ檜ひのきこずえの梢と見えたり、じつと動かぬ様でいながら、いつとはなく、全く違った形に化けて行った。

蜃気楼の魔力が、人間を気違いにするものであったなら、恐らく私は、少くとも帰り途の汽車の中までは、その魔力を逃れるこ

とが出来なかつたのであろう。二時間の余も立ち尽して、大空の妖異を眺めていた私は、その夕方魚津を立つて、汽車の中に一夜を過ごすまで、全く日常と異つた気持ちでいたことは確かである。若しかしたら、それは通り魔の様に、人間の心をかすめ冒す所の、一時的狂気の類でもあつたであらうか。

魚津の駅から上野への汽車に乗つたのは、夕方の六時頃であつた。不思議な偶然であらうか、あの辺の汽車はいつでもそのようなか、私の乗つた二等車は、教会堂の様にガランとしていて、私の外にたつた一人の先客が、向うの隅のクッションに蹲つてゐるばかりであつた。

汽車は淋しい海岸の、けわしい岬や砂浜の上を、単調な機械の

音を響かせて、際はてしもなく走っている。沼の様な海上の、靄の奥深く、黒血くろちの色の夕焼が、ボンヤリと感じられた。異様に大きく見える白帆が、その中を、夢の様に滑っていた。少しも風のない、むしむしする日であったから、所々開かれた汽車の窓から、進行につれて忍び込むそよ風も、幽霊ゆうれいの様に尻切れとんぼであった。沢たくさん山の短いトンネルと雪除よけの柱の列が、広漠こうばくたる灰色の空と海とを、縞目しまめに区切つて通り過ぎた。

親不知の断崖を通過する頃、車内の電燈と空の明るさと同じに感じられた程、夕闇が迫つて来た。丁度その時分向うの隅のたつた一人の同乗者が、突然立上つて、クツシヨンの上に大きな黒く縷ろ子じゆすの風呂敷ふろしきを広げ、窓に立てかけてあつた、二尺に三尺程の、

扁平<sup>へんぺい</sup>な荷物を、その中へ包み始めた。それが私に何とやら奇妙な感じを与えたのである。

その扁平なものは、多分額<sup>がく</sup>に相違ないのだが、その表側の方を、何か特別の意味でもあるらしく、窓ガラスに向けて立てかけてあつた。一度風呂敷に包んであつたものを、態々<sup>わざわざ</sup>取出して、そんな風に外に向けて立てかけたものとしか考えられなかつた。それに、彼が再び包む時にチラと見た所によると、額の表面に描かれた極彩色の絵が、妙に生々しく、何となく世の常<sup>つね</sup>ならず見えただことであつた。

私は更<sup>あらた</sup>めて、この変<sup>へん</sup>てこな荷物の持主を観察した。そして、持主その人が、荷物の異様さにもまして、一段と異様であつたこと

に驚かされた。

彼は非常に古風な、我々の父親の若い時分の色あせた写真で見ることの出来ない様な、襟えりの狭い、肩のすぼけた、黒の背広服を着ていたが、併しかしそれが、背が高く、足の長い彼に、妙にシツクリと合つて、甚はなはだ意氣いきにさえ見えたのである。顔は細ほそおも面てで、両眼が少しギラギラし過ぎていた外は、一体によく整つていて、スマートな感じであつた。そして、綺麗きれいに分けた頭髮が、豊に黒々と光つているので、一見四十前後であつたが、よく注意して見ると、顔中おびただに夥しわしい皺があつて、一飛びに六十位にも見えぬことはなかつた。この黒々とした頭髮と、色白の顔面を縦横にきざんだ皺との対照が、初めてそれに氣附いた時、私をハツとさ

せた程も、非常に不気味な感じを与えた。

彼は町<sup>ていねい</sup>に荷物を含み終ると、ひよいと私の方に顔を向けたが、丁度私の方でも熱心に相手の動作を眺めていた時であったから、二人の視線がガツチリとぶつつかってしまった。すると、彼は何か恥かし相<sup>そうくちびる</sup>に唇の隅を曲げて、幽<sup>かす</sup>かに笑って見せるのであった。私も思わず首を動かして挨拶<sup>あいさつ</sup>を返した。

それから、小駅を二三通過する間、私達はお互<sup>たがい</sup>の隅に坐つたまま、遠くから、時々視線をまじえては、気まづく外方<sup>そっぽ</sup>を向くことを、繰返していた。外は全く暗闇になっていた。窓ガラスに顔を押しつけて覗いて見ても、時たま沖の漁船の舷<sup>げん</sup>燈<sup>とう</sup>が遠く遠くポツツリと浮んでいる外には、全く何の光りもなかった。際涯<sup>はてし</sup>のな

い暗闇の中に、私達の細長い車室丈<sup>だ</sup>けが、たった一つの世界の様に、いつまでもいつまでも、ガタンガタンと動いて行つた。そのほの暗い車室の中に、私達二人丈<sup>だ</sup>けを取り残して、全世界が、あらゆる生き物が、跡<sup>あと</sup>方<sup>かた</sup>もなく消え失<sup>う</sup>せてしまった感じであつた。私達の二等車には、どの駅からも一人の乗客もなかつたし、列車ボーイや車掌も一度も姿を見せなかつた。そういう事も今になつて考えて見ると、甚だ奇怪に感じられるのである。

私は、四十歳にも六十歳にも見える、西洋の魔術師の様な風<sup>ふうさ</sup>采<sup>さい</sup>のその男が、段々怖くなつて来た。怖さというものは、外<sup>ほか</sup>にまぎれる事柄のない場合には、無限に大きく、身体中<sup>からだ</sup>一杯に拡が<sup>ひろ</sup>つて行くものである。私は遂<sup>つい</sup>には、産毛<sup>うぶげ</sup>の先までも怖さが満ちて、

たまらなくなつて、突然立上ると、向うの隅のその男の方へツカと歩いて行つた。その男がいとわしく、恐ろしければこそ、私はその男に近づいて行つたのであつた。

私は彼と向き合つたクツションへ、そつと腰をおろし、近寄れば一層異様に見える彼の皺だらけの白い顔を、私自身が妖怪でもある様な、一種不可思議な、顛てんとう倒した気持で、目を細く息を殺してじつと覗き込んだものである。

男は、私が自分の席を立つた時から、ずっと目で私を迎える様にしていたが、そうして私が彼の顔を覗き込むと、待ち受けていた様に、顎あごで傍かたわらの例の扁平な荷物を指し示し、何の前置きもなく、さもそれが当然の挨拶でもある様に、

「これでございますか」

と云つた。その口調が、余り当り前であつたので、私は却て、ギョツとした程であつた。

「これが御覧になりたいのでございましょう」

私が黙っているので、彼はもう一度同じことを繰返した。

「見せて下さいますか」

私は相手の調子に引込まれて、つい変なことを云つてしまった。私は決してその荷物を見たいために席を立つた訳ではなかつたのだけれど。

「喜んで御見せ致しますよ。わたくしは、さつきから考えていたのでございますよ。あなたはきつとこれを見にお出いでなさるだろ

うとね」

男は——寧ろ老人と云った方がふさわしいのだが——そう云いながら、長い指で、器用に大風呂敷をほどいて、その額みたいなものを、今度は表を向けて、窓の所へ立てかけたのである。

私は一目チラツと、その表面を見ると、思わず目をとじた。何故であつたか、その理由は今でも分らないのだが、何となくそうしなければならぬ感じがして、数秒の間目をふさいでいた。再び目を開いた時、私の前に、嘗て見たことのない様な、奇妙なものがあつた。と云つて、私はその「奇妙」な点をハッキリと説明する言葉を持たぬのだが。

額には歌舞伎芝居の御殿の背景みたいに、幾つもの部屋を打抜

いて、極度の遠近法で、あおだたみ青こやし暈と格子てんじょう天井が遙か向うの方まで続いている様な光景が、あゐ藍を主としたどろえのぐ泥絵具で毒々しく塗りつけてあつた。左手の前方には、墨黒々と不細工な書院風の窓が描かれ、同じ色の文机ふづくえが、その傍に角度を無視した描き方で、据えてあつた。それらの背景は、あの絵馬えまふだ札の絵の独特な画風に似ていたと云えば、一番よく分るであろうか。

その背景の中に、一尺位の丈の二人の人物が浮き出していた。浮き出していたと云うのは、その人物丈けが、押絵細工で出来ていたからである。くろびろうど黒天鷲絨の古風な洋服を着たしらが白髪きの老人が、窮ゆうくつ屈ゆうくつそうに坐っていると、（不思議なことには、その容貌が、

髪の色を除くと、額の持主の老人にそのままなばかりか、着てい

る洋服の仕立方までそっくりであつた）緋鹿ひかの子の振袖ふりそでに、黒  
 繻子の帯の映りのよい十七八の、水のたれる様な結ゆい綿わたの美少女  
 が、何とも云えぬ嬌きょう羞ゆうを含んで、その老人の洋服の膝ひざにしな  
 だれかかっている、謂いわば芝居の濡れ場に類する画面であつた。

洋服の老人と色娘の対照と、甚だ異様であつたことは云うまで  
 もないが、だが私が「奇妙」に感じたというのはそのことではな  
 い。

背景の粗雑に引かえて、押絵の細工の精巧なことは驚くばかり  
 であつた。顔の部分は、白絹は凹おうとつ凸とつを作つて、細い皺まで一つ  
 一つ現わしてあつたし、娘の髪は、本当の毛髪を一本一本植えつ  
 けて、人間の髪を結う様に結つてあり、老人の頭は、これも多分

本物の白髪を、丹念に植えたものに相違なかった。洋服には正しい縫い目があり、適当な場所に粟粒程の釦までつけてあるし、娘の乳のふくらみと云い、腿のあたりの艶めいた曲線と云い、こぼれた緋縮緬ひぢりめん、チラと見える肌の色、指には貝殻かいがらの様な爪が生えていた。虫眼鏡むしめがねで覗いて見たら、毛穴や産毛まで、ちゃんと拵こしらえてあるのではないかと思われた程である。

私は押絵と云えば、羽子板はごいたの役者の似顔の細工しか見たことがなかったが、そして、羽子板の細工にも、随分精巧なものもあるのだけれど、この押絵は、そんなものとは、まるで比較にもならぬ程、巧緻こうちを極めていたのである。恐らくその道の名人の手に成ったものであるうか。だが、それが私の所謂いわゆる「奇妙」な点で

はなかつた。

額全体が余程よほど古いものらしく、背景の泥絵具は所々はおちげ落ちていたし、娘の緋鹿の子も、老人の天鷲絨も、見る影もなく色あせていたけれど、はげ落ち色あせたなりに、名めいじよう状がたし難がたき毒々しさを保ち、ギラギラと、見る者の眼底に焼やきつく様な生氣を持つていたことも、不思議と云えば不思議であつた。だが、私の「奇妙」という意味はそれでもない。

それは、若し強しいて云うならば、押絵の人物が二つとも、生きていたことである。

文楽ぶんらくの人形芝居で、一日の演技の内に、たった一度か二度、それもほんの一瞬間、名人の使っている人形が、ふと神の息吹いぶきを

かけられでもした様に、本当に生きていることがあるものだが、この押絵の人物は、その生きた瞬間の人形を、命の逃げ出す隙をすき与えず、咄嗟とつさの間に、そのまま板にはりつけたという感じで、永遠に生きながらえているかと見えたのである。

私の表情に驚きの色を見て取ったからか、老人は、いとたものしげな口調で、殆どほとん叫ぶ様に、

「アア、あなたは分つて下さるかも知れません」

と云いながら、肩から下げていた、黒革くろかわのケースを、叮嚀かぎに鍵で開いて、その中から、いとも古風な双眼鏡を取り出してそれを私の方へ差出すのであつた。

「コレ、この遠眼鏡とおめがねで一度御覧下さいませ。イエ、そこからで

は近すぎます。失礼ですが、もう少しあちらの方から。左様丁度さようその辺がようございましょう」

誠に異様な頼みではあつたけれど、私は限りなき好奇心のとりことなつて、老人の云うがままに、席を立つて額から五六歩遠ざかった。老人は私の見易い様に、両手で額を持って、電燈にかざしてくれた。今から思うと、実に変てこな、氣違ひめいた光景であつたに相違ないのである。

遠眼鏡と云うのは、恐らく二三十年も以前の舶来品であろうか、私達が子供の時分、よく眼鏡屋の看板で見かけた様な、異様な形のプリズム双眼鏡であつたが、それが手摺てずれの為に、黒い覆おおい皮わがはげて、所々真鍮しんちゆうの生地きじが現われているという、持主

の洋服と同様に、如何にも古風な、物懐かしい品物であつた。

私は珍らしさに、暫くその双眼鏡をひねくり廻していたが、や

がて、それを覗く為に、両手で眼の前に持つて行つた時である。

突然、実に突然、老人が悲鳴に近い叫声を立てたので、私は、

危く眼鏡を取落す所であつた。

「いけません。いけません。それはさかさですよ。さかさに覗いてはいけません。いけません」

老人は、真青になつて、目をまんまるに見開いて、しきりと

手を振つていた。双眼鏡を逆に覗くことが、何ぞそれ程大變なのか、私は老人の異様な挙動を理解することが出来なかつた。

「成程、成程、さかさでしたっけ」

私は双眼鏡を覗くことに気を取られていたので、この老人の不審な表情を、さして気にもとめず、眼鏡を正しい方向に持ち直す、急いでそれを目に当てて押絵の人物を覗いたのである。

焦点が合って行くに従って、二つの円形の視野が、徐々に一つに重なり、ボンヤリとした虹の様なもの、段々ハッキリして来ると、びっくりする程大きな娘の胸から上が、それが全世界でもある様に、私の眼界一杯に拡がった。

あんな風な物の現われ方を、私はあとにも先にも見たことがないので、読む人に分らせるのが難儀なのだが、それに近い感じを思い出して見ると、例えば、舟の上から、海にもぐったあま蟹の、あの瞬間の姿に似ていたとでも形容すべきであろうか。蟹の裸はだかみ身

が、底の方にある時は、青い水の層の複雑な動揺の為に、その身体が、まるで海草の様に、不自然にクネクネと曲り、輪廓りんかくもぼやけて、白っぽいお化ばけみたに見えているが、それが、つうツと浮上つて来るに従つて、水の層の青さが段々薄くなり、形がハッキリして来て、ポツカリと水上に首を出すと、その瞬間、ハッと目が覚めた様に、水中の白いお化たちまが、忽ち人間の正体を現わすのである。丁度それと同じ感じで、押絵の娘は、双眼鏡の中で、私の前に姿を現わし、実物大の、一人の生きた娘として、蠢うごめき始めたのである。

十九世紀の古風なプリズム双眼鏡の玉の向う側には、全く私達の思いも及ばぬ別世界があつて、そこに結綿ゆいわたの色いろむすめ娘と、古

風な洋服の白髪男とが、奇怪な生活を営んでいる。覗いては悪いものを、私は今魔法使に覗かされているのだ。といった様な形容の出来ない変てこな気持で、併し私は憑つかれた様にその不可思議な世界に見入ってしまった。

娘は動いていた訳ではないが、その全身の感じが、肉眼で見た時とは、ガラリと変つて、生氣に満ち、青白い顔がやや桃色に上気し、胸は脈打ち（實際私は心臓の鼓動こどうをさえ聞いた）肉体からは縮緬の衣裳を通して、むしむしと、若い女の生氣が蒸発して居る様に思われた。

私は一渡り、女の全身を、双眼鏡の先で、嘗なめ廻してから、その娘がしなだれ掛っている、仕合しあわせな白髪男の方へ眼鏡を転じた。

老人も、双眼鏡の世界で、生きていたことは同じであったが、見た所四十程も年の違う、若い女の肩に手を廻して、さも幸福そうな形でありながら、妙なことには、レンズ一杯の大きさに写つた、彼の皺の多い顔が、その何百本の皺の底で、いぶかしく苦悶くもんの相を現わしているのである。それは、老人の顔がレンズの為に眼前一尺の近さに、異様に大きく迫っていたからでもあつたであろうが、見つめていればいる程、ゾツと怖くなる様な、悲痛と恐怖との混り合つた一種異様の表情であつた。

それを見ると、私はうなされた様な気分になつて、双眼鏡を覗いていることが、耐え難く感じられたので、思わず、目を離して、キョロキョロとあたりを見廻した。すると、それはやっぱり淋し

夜の汽車の中であつて、押絵の額も、それをささげた老人の姿も、元のままで、窓の外は真ま暗くらだし、単調な車輪の響ひびきもなく聞えていた。悪夢から醒さめた気持であつた。

「あなた様は、不思議相そな顔をしておいでなさいますね」

老人は額を、元の窓の所へ立てかけて、席につくと、私にもその向う側へ坐る様に、手真似をしながら、私の顔を見つめて、こんなことを云つた。

「私の頭が、どうかしている様です。いやに蒸むしますね」

私はてれ隠しみたいな挨拶をした。すると老人は、猫背ねこせになつて、顔をぐつと私の方へ近寄せ、膝の上で細長い指を合図でもする様に、ヘラヘラと動かしながら、低い低い囁ささき声になつて、

「あれらは、生きて居りましたろう」

と云つた。そして、さも一大事を打開けるといつた調子で、一層猫背になつて、ギラギラした目をまん丸に見開いて、私の顔を穴のあく程見つめながら、こんなことを囁くのであつた。

「あなたは、あれらの、本当の身の上話を聞き度たいとはおぼしめしませんかね」

私は汽車の動揺と、車輪の響の為に、老人の低い、つぶや呟く様な声を、聞き間違えたのではないかと思つた。

「身の上話とおっしゃいましたか」

「身の上話でございますよ」老人はやつぱり低い声で答えた。

「殊ことに、一方の、白髪の老人の身の上話をでございますよ」

「若い時分からのですか」

私も、その晩は、何故か妙に調子はずれな物の云い方をした。

「ハイ、あれが二十五歳の時のお話でございますよ」

「是非<sup>ぜひ</sup>うかがいたいものですね」

私は、普通の生きた人間の身の上話をでも催促する様に、ごく何でもないことのように、老人をうながしたのである。すると、老人は顔の皺を、さも嬉しそうにゆがめて、「アア、あなたは、やつぱり聞いて下さいますね」と云いながら、さて、次の様な世にも不思議な物語を始めたのであった。

「それはもう、一生涯の大事件ですから、よく記憶して居りますが、明治二十八年の四月の、兄があんなに（と云って彼は押絵の

老人を指さした）なりましたのが、二十七日の夕方のござりしました。当時、私も兄も、まだ部屋住みで、住居は日本橋すまい にほんばしとお通三丁目りでして、親爺おやしが呉服商を営んで居りましたがね。何でも浅草の十二階が出来て、間もなくのございましたよ。だもんですから、兄なんぞは、毎日の様にあの凌雲閣りょううんかくへ昇つて喜んでいたものです。と申しますが、兄は妙に異国物が好きで、新しがり屋でござんしたからね。この遠眼鏡にしろ、やつぱりそれで、兄が外国船の船長の持物だったという奴を、横浜よこはまの支那人町の、変てこな道具屋の店先で、めつけて来ましてね。当時にしちやあ、随分高いお金を払ったと申して居りましたつけ」

老人は「兄が」と云うたびに、まるでそこにその人が坐つてで

もいる様に、押絵の老人の方に目をやったり、指さしたりした。老人は彼の記憶にある本当の兄と、その押絵の白髪の老人とを、混同して、押絵が生きて彼の話を聞いてでもいる様な、すぐ側そばに第三者を意識した様な話し方をした。だが、不思議なことに、私はそれを少しもおかしいとは感じなかった。私達はその瞬間、自然の法則を超越した、我々の世界とどこかで喰違ところっている別の世界に住んでいたらしいのである。

「あなたは、十二階へ御昇りなすったことがおありですか。アア、おありなさらない。それは残念ですね。あれは一体どこの魔法使が建てましたものか、実に途方もない、変てこれんな代物でございましたよ。表面は伊太利イタリーの技師のバルトンと申すものが設計し

たことになっていましたかね。まあ考えて御覧なさい。その頃の浅草公園と云えば、名物が先ず蜘蛛男くもおとこの見世物みせもの、娘剣舞に、玉乗り、源水の独楽廻こままわしに、覗きからくりなどで、せいぜい変った所が、お富士さまの作り物に、メーズと云つて、八陣隠れ杉の見世物位でございましたからね。そこへあなた、ニヨキニヨキと、まあ飛んでもない高い煉瓦れんが造りの塔が出来ちまつたんですから、驚くじゃござんせんか。高さが四十六間と申しますから、半丁の余で、八角型の頂上が、唐人とうじんの帽子みたいに、とんがっていて、ちよつと高台へ昇りさえすれば、東京中どこからでも、その赤いお化が見られたものです。

今も申す通り、明治二十八年の春、兄がこの遠眼鏡を手に入れ

て間もない頃でした。兄の身に妙なことが起つて参りました。親爺なんぞ、兄め気でも違ふのじやないかつて、ひどく心配して居りましたが、私もね、お察しでしょうが、馬鹿に兄思いでしてね、兄の変てこれんなそぶりが、心配で心配でたまらなかつたもので、す。どんな風かと申しますと、兄はご飯もろくろくたべないで、家内の者とも口を利かず、家うちにいる時は一間にとじ籠こもつて考え事ばかりしている。身体は瘦やせてしまい、顔は肺病やみの様に土つちけ気色いろで、目ばかりギョロギョロさせている。尤も平常もつとふだんから顔色のいい方じやあござんせんでしたがね。それが一倍青ざめて、沈んでいるのですから、本当に気の毒な様でした。その癖くせね、そんなでいて、毎日欠かさず、まるで勤めにでも出る様に、おひるツ

から、日暮れ時分まで、フラフラとどつかへ出掛けるんです。どこへ行くのかつて、聞いて見ても、ちつとも云いません。母親が心配して、兄のふさいでいる訳を、手を変え品を変え尋ねても、少しも打開うちあけません。そんなことが一月程も続いたのですよ。

あんまり心配なものだから、私はある日、兄が一体どこへ出掛  
るのかと、ソツとあとをつけました。そうする様に、母親が私に  
頼むもんですからね。兄はその日も、丁度今日の様などんよりと  
した、いやな日でござんしたが、おひる過すぎから、その頃兄の工風くふう  
で仕立てさせた、当時としては飛び切りハイカラな、黒天鷲絨の  
洋服を着ましてね、この遠眼鏡を肩から下げ、ヒヨロヒヨロと、  
日本橋通りの、馬車鉄道の方へ歩いて行くのです。私は兄に気ど

られぬ様に、ついて行つた訳ですよ。よござんすか。しますとね、兄は上野行きうえのの馬車鉄道を待ち合わせて、ひよいとそれに乗り込んでしまったのです。当今の電車と違つて、次の車に乗つてあとをつけるという訳には行きません。何しろ車台が少すくのござんすか  
らね。私は仕方がないので母親に貰もらつたお小遣いをふんぱつして、人力車に乗りました。人力車だつて、少し威勢のいい挽ひきこ子なれば馬車鉄道を見失わない様に、あとをつけるなんぞ、訳なかつたものでございますよ。

兄が馬車鉄道を降りると、私も人力車を降りて、又テクテクと跡をつける。そうして、行きついた所が、なんと浅草の観音様じやございませんか。兄は仲なかみせ店から、お堂の前を素通りして、お

堂裏の見世物小屋の間を、人波をかき分ける様にしてさつき申上げた十二階の前まで来ますと、石の門を這<sup>はい</sup>入<sup>い</sup>つて、お金を払つて「凌雲閣」という額の上った入口から、塔の中へ姿を消したじやあございませんか。まさか兄がこんな所へ、毎日毎日通<sup>かよ</sup>つていよとは、夢にも存じませんので、私はあきれてしまいましたよ。子供心にね、私はその時まで<sup>はたち</sup>二十にもなつてませんでしたので、兄はこの十二階の化物に魅<sup>み</sup>入<sup>い</sup>られたんじゃないかなんて、変なことを考えたものですよ。

私は十二階へは、父親につれられて、一度昇つた切りで、その後行つたことがありませんので、何だか気味が悪い様に思いましたが、兄が昇つて行くものですから、仕方がないので、私も、一

階位おくれて、あの薄暗い石の段々を昇って行きました。窓も大きくございませぬし、煉瓦の壁が厚うござんすので、穴蔵の様に冷々と致しましてね。それに日にっしん清戦争の当時ですから、その頃は珍らしかつた、戦争の油絵が、一方の壁にずっと懸け並べてあります。まるで狼みたいなの、おつそろしい顔をして、吠えながら、突貫している日本兵や、剣つき鉄砲に脇腹をえぐられ、ふき出す血のりを両手で押さえて、顔や唇を紫色にしてもがいている支那兵や、ちよんぎられた辮べんぱつ髪かみの頭が、風船玉の様に空高く飛上っている所や、何とも云えない毒々しい、血みどろの油絵が、窓からの薄暗い光線で、テラテラと光っているのでございますよ。その間を、陰気な石の段々が、蝸かたつむり牛うしの殻からみために、上へ上へと

際限もなく続いて居ります。本当に変てこれんな気持ちでしたよ。  
 頂上は八角形の欄干丈<sup>らんかん</sup>けで、壁のない、見晴らしの廊下にな  
 っていますね、そこへたどりつくと、俄<sup>にわか</sup>にパツと明るくなつて、  
 今までの薄暗い道中が長うござんただけに、びっくりしてしま  
 います。雲が手の届きそうな低い所にあつて、見渡すと、東京中  
 の屋根がごみみたいに、ゴチャゴチャしていて、品川<sup>しながわ</sup>の御台場<sup>おだいば</sup>  
 が、盆石<sup>ぼんせき</sup>の様に见えて居ります。目まいがしそうなのを我慢し  
 て、下を覗きますと、観音様<sup>かんのんさま</sup>の御堂だつてずっと低い所にあ  
 りますし、小屋掛けの見世物が、おもちゃの様で、歩いている人間  
 が、頭と足ばかりに見えるのです。

頂上には、十人余りの見物が一かたまりになつておっかな相な

顔をして、ボソボソ小声で囁きながら、品川の海の方を眺めて居りました。兄はと見ると、それとは離れた場所に、一人ぼつちで、遠眼鏡を目に当てて、しきりと浅草の境<sup>けいだい</sup>内を眺め廻して居りました。それをうしろから見ますと、白つぼくどんよりどんよりとした雲ばかりの中に、兄の天鷲絨の洋服姿が、クツキリと浮上つて、下の方のゴチャゴチャしたものが見えぬものですか。兄だということは分つていまして、何だか西洋の油絵の中の人物みたいな気持がして、神々<sup>こうこう</sup>しい様で、言葉をかけるのも<sup>はばか</sup>憚られた程でございました。

でも、母の云いつけを思い出しますと、そうもしていられますので、私は兄のうしろに近づいて『兄さん何を見ていらつしや

います』と声をかけたのでございます。兄はビクツとして、振向きましたが、きまらず氣拙い顔をして何も云いません。私は『兄さんの此このごろ頃の御様子には、御父さんもお母さんも大変心配していらつしやいます。毎日毎日どこへ御出掛なさるのかと不思議に思つて居りましたら、兄さんはこんな所へ来ていらしたのでございますね。どうかその訳を云つて下さいまし。日頃仲よしの私に丈けでも打開けて下さいまし』と、近くに人のいないのを幸いに、その塔の上で、兄をかき口説くどいたものですよ。

仲々打開けませんでしたが、私が繰返し繰返し頼むものですか、兄も根負こんまけをしたと見えまして、とうとう一ヶ月来の胸の秘密を私に話してくれました。ところが、その兄の煩悶はんもんの原因と

申すものが、これが又誠に変てこれんな事柄だったのでございませよ。兄が申しますには、一月ばかり前に、十二階へ昇りまして、この遠眼鏡で観音様の境内を眺めて居りました時、人込みの間に、チラツと、一人の娘の顔を見たのだ相でございます。その娘が、それはもう何とも云えない、この世のものとも思えない、美しい人で、日頃女には一いっこう向冷淡であつた兄も、その遠眼鏡の中の娘丈けには、ゾツと寒気がした程も、すっかり心を乱されてしまつたと申しますよ。

その時兄は、一目見た丈けで、びっくりして、遠眼鏡をはずしてしまったものですから、もう一度見ようと思つて、同じ見当を夢中になつて探した相ですが、眼鏡の先が、どうしてもその娘の

顔にぶっつきありません。遠眼鏡では近くに見えても実際は遠方のことですし、沢山の人混みの中ですから、一度見えたからと云つて、二度目に探し出せると極きまったものではございませんからね。

それからと申すもの、兄はこの眼鏡の中の美しい娘が忘れられず、極ごくごく々内気なひとでしたから、古風な恋わずらいをわずらい始めたのでございます。今のお人はお笑いなさるかも知れませんが、その頃の人間は、誠におっとりしたものでして、行きずりに一目見た女を恋して、わずらいついた男なども多かつた時代でございますからね。云うまでもなく、兄はそんなご飯もろくろくたべられない様な、衰えた身体を引きずつて、又その娘が観音様の境内を通りかかることもあろうかと悲しい空そらだの頼みから、毎日毎

日、勤めの様に、十二階に昇つては、眼鏡を覗いていた訳でございます。恋というものは、不思議なものでございますね。

兄は私に打開けてしまふと、又熱病やみの様に眼鏡を覗き始めましたつけが、私は兄の気持にすっかり同情致しましてね、千に一つも望みのない、無駄むだな探し物ですけれど、お止よしなさいと止めだてする気も起らず、余りのことに涙ぐんで、兄のうしろ姿をじつと眺めていたものですよ。するとその時……ア、私はあの怪しくも美しかった光景を、忘れることが出来ません。三十年以上も昔のことですけれど、こうして眼をふさぎますと、その夢の様な色どりが、まざまざと浮んで来る程でございます。

さつきも申しました通り、兄のうしろに立っていますと、見え

るものは、空ばかりで、モヤモヤとした、むら雲の中に、兄のほつそりとした洋服姿が、絵の様に浮上つて、むら雲の方で動いているのを、兄の身体が宙に漂うかと見み誤あやまるばかりでございました。がそこへ、突然、花火でも打上げた様に、白っぽい大空の中を、赤や青や紫の無数の玉が、先を争つて、フワリフワリと昇つて行つたのでございます。お話したのでは分りますまいが、本当に絵の様に、又何かの前兆の様で、私は何とも云えない怪しい気持ちになつたものでした。何であろうと、急いで下を覗いて見ますと、どうかしたはずみで、風船屋が粗相そそうをして、ゴム風船を、一度に空へ飛ばしたものと分りましたが、その時分は、ゴム風船そのものが、今よりはずっと珍らしゆうござんしたから正体が分つ

ても、私はまだ妙な氣持がして居りましたものですよ。

妙なもので、それがきつかけになつたという訳でもありません。いが、丁度その時、兄は非常に興奮した様子で、青白い顔をぽつと赤らめ息をはずませて、私の方へやって参り、いきなり私の手をとつて『さあ行こう。早く行かぬと間に合わぬ』と申して、グングン私を引張るのでございます。引張られて、塔の石段をかけ降りながら、訳を尋ねますと、いつかの娘さんが見つかったらしいので、あおだたみ青 畳を敷いた広い座敷に坐っていたから、これから行つても大丈夫元の所にいると申すのでございます。

兄が見当をつけた場所というのは、観音堂の裏手の、大きな松の木が目印で、そこに広い座敷があつたと申すのですが、さて、

二人でそこへ行つて、探して見ましても、松の木はちゃんとありますけれど、その近所には、家らしい家もなく、まるで狐につままれた様な鹽梅あんばいなのですよ。兄の氣の迷いだとは思いましたが、しおれ返つている様子が、余り氣の毒だものですから、氣休めに、その辺の掛茶屋などを尋ね廻つて見ましたけれども、そんな娘さんの影も形もありません。

探している間に、兄と分れ分れになつてしまいました。掛茶屋を一巡して、暫くたつて元の松の木の下へ戻つて参りますとね、そこには色々な露店に並んで、一軒の覗きからくり屋が、ピシヤンピシヤンと鞭むちの音を立てて、商売をして居りましたが、見ますと、その覗きの眼鏡を、兄が中腰になつて、一生懸命覗いていた

じやございませんか。『兄さん何をしていらつしやる』と云つて、肩を叩きますと、ビックリして振向きましたが、その時の兄の顔を、私は今だに忘れることが出来ませんよ。何と申せばよろしいか、夢を見ている様などでも申しますか、顔の筋がたるんでしまつて、遠い所を見ている目つきになつて、私に話す声さえも、變にうつろに聞えたのでございます。そして、『お前、私達が探していた娘さんはこの中にいるよ』と申すのです。

そう云われたものですから、私は急いでおあしを払つて、覗きの眼鏡を覗いて見ますと、それは八百屋お七の覗きからくりでした。丁度吉祥寺きちしやうじの書院で、お七が吉三きちざよにしなだれかかっている絵が出て居りました。忘れもしません。からくり屋の夫婦者は、

しわがれ声を合せて、鞭で拍子を取りながら、『膝でつっらついで、目で知らせ』と申す文句を歌っている所でした。アア、あの『膝でつっらついで、目で知らせ』という変な節ふしまわ廻しが、耳についている様でございます。

覗き絵の人物は押絵になって居りましたが、その道の名人の作であつたのでしようね。お七の顔の生々として綺麗であつたこと。私の目にさえ本当に生きている様に見えたのですから、兄があんなことを申したのも、全く無理はありません。兄が申しますには『たとい仮令この娘さんが、拵えものの押絵だと分つても、私はどうもあきらめられない。悲しいことだがあきらめられない。たつた一度でいい、私もあの吉三の様な、押絵の中の男になって、この娘

さんと話がして見たい』と云つて、ぼんやりと、そこに突つ立つたまま、動こうともしないのでございます。考えて見ますとその覗きからくりの絵が、光線を取る為に上の方が開<sup>あ</sup>けてあるので、それが斜めに十二階の頂上からも見えたものに違いありません。

その時分には、もう日が暮<sup>くれ</sup>かけて、人足<sup>ひとあし</sup>もまばらになり、覗

きの前にも、二三人のおかっぱの子供が、未練らしく立去り兼ねて、うろうろしているばかりでした。昼間からどんよりと曇つていたのが、日暮には、今にも一雨来そうに、雲が下つて来て、一層<sup>おき</sup>圧えつけられる様な、気でも狂うのじやないかと思う様な、いやな天候になつて居りました。そして、耳の底にドロドロと太鼓<sup>たいこ</sup>の鳴っている様な音が聞えているのですよ。その中で、兄は、じ

つと遠くの方を見据えて、いつまでもいつまでも、立ちつくして居りました。その間が、たつぷり一時間はあつた様に思われます。

もうすっかり暮切くれきつて、遠くの玉乗りの花瓦斯はなガスが、チロチロと美しく輝き出した時分に、兄はハツと目が醒めた様に、突然私の腕を掴つかんで『アア、いいことを思いついた。お前、お頼みだから、この遠眼鏡をさかさにして、大きなガラス玉の方を目に当てて、そこから私を見ておくれでないか』と、変なことを云い出しました。『何故です』つて尋ねても、『まあいいから、そうしてお呉くれな』と申して聞かないのでございます。一体私は生れつき眼鏡類を、余り好みませんので、遠眼鏡にしろ、顕微鏡にしろ、遠い所の物が、目の前へ飛びついて来たり、小さな虫けらが、けだも

のみにたいに大きくなる、お化じみた作用が薄気味悪いのですよ。で、兄の秘蔵の遠眼鏡も、余り覗いたことがなく、覗いたことが少い丈けに、余計それが魔<sup>ま</sup>性<sup>しょう</sup>の器械に思われたものです。しかも、日が暮て人顔もさだかに見えぬ、うすら淋しい観音堂の裏で、遠眼鏡をさかさにして、兄を覗くなんて、氣違いじみてもいますれば、薄気味悪くもありましたが、兄がたつて頼むものですから、仕方なく云われた通りにして覗いたのですよ。さかさに覗くのですから、二三間向うに立っている兄の姿が、二尺位に小さくなつて、小さい丈けに、ハッキリと、闇の中に浮出して見えるのです。外の景色は何も映らないで、小さくなつた兄の洋服姿丈けが、眼鏡<sup>ほか</sup>の真中に、チンと立っているのです。それが、多分兄があとじ

さりに歩いて行ったのでしよう。見る見る小さくなって、とうとう一尺位の、人形みたいな可愛らしい姿になってしまいました。そして、その姿が、ツーツと宙に浮いたかを見ると、アツと思う間に、闇の中へ溶け込んでしまったのでございます。

私は怖くなって、（こんなことを申すと、年とし甲がい斐いもないと思おぼし

めし召めしましようが、その時は、本当にゾツと、怖さが身にしみたものですよ）いきなり眼鏡を離して、「兄さん」と呼んで、兄の見えなくなつた方へ走り出しました。ですが、どうした訳か、いくら探しても探しても兄の姿が見えません。時間から申しても、遠くへ行つた筈はずはないのに、どこを尋ねても分りません。なんと、あなた、こうして私の兄は、それつきり、この世から姿を消して

しまったのでございますよ……それ以来というものの、私は一層遠眼鏡という魔性の器械を恐れる様になりました。殊ことにも、このこの国の船長とも分らぬ、異人の持物であつた遠眼鏡が、特別いやでして、外ほかの眼鏡は知らず、この眼鏡丈だけは、どんなことがあつても、さかさに見てはならぬ。さかさに覗けば凶事が起ると、固く信じているのでございます。あなたがさつき、これをさかさにお持ちなすつた時、私が慌あわててお止め申した訳がお分りでございましょう。

ところが、長い間探し疲れて、元の覗き屋の前へ戻つて参つた時でした。私はハタとある事に気がついたので。と申すのは、兄は押絵の娘に恋こがれた余り、魔性の遠眼鏡の力を借りて、自

分の身体を押絵の娘と同じ位の大きさに縮めて、ソツと押絵の世  
界へ忍び込んだのではあるまいかということでした。そこで、私  
はまだ店をかたづけないうでいた覗き屋に頼みまして、吉祥寺の場  
を見せて貰いましたが、なんとあなた、案あんじょうの定、兄は押絵になつ  
て、カンテラの光りの中で、吉三の代りに、嬉し相な顔をして、  
お七を抱きしめていたではありませんか。

でもね、私は悲しいとは思いませんで、そうして本望ほんもうを達し  
た、兄の仕合せが、涙の出る程嬉しかったものですよ。私はその  
絵をどんなに高くてもよいから、必ず私に譲ってくれと、覗き屋  
に固い約束をして、（妙なことに、小姓の吉三の代りに洋服姿の  
兄が坐っているのを、覗き屋は少しも気がつかない様子でした）

家へ飛んで帰って、一伍いちぶしじゆう一什を母に告げました所、父も母も、何を云うのだ。お前は氣でも違つたのじゃないかと申して、何と云つても取上げてくれません。おかしいじやありませんか。ハハハハハハ」老人は、そこで、さもさも滑こっけい稽だと云わぬばかりに笑い出した。そして、変なことには、私も亦また、老人に同感して、一緒になつて、ゲラゲラと笑つたのである。

「あの人たちは、人間は押絵なんぞになるものじやないと思ひ込んでいたのですよ。でも押絵になつた証拠には、その後兄のちの姿が、ふつつりと、この世から見えなくなつてしまつたじやありませんか。それをも、あの人たちは、家出したのだなんぞと、まるで見当違いな当て推量をしているのですよ。おかしいですね。結局、

私は何と云われても構わず、母にお金をねだつて、とうとうその覗き絵を手に入れ、それを持って、箱根はこねから鎌倉かまくらの方へ旅をしました。それはね、兄に新婚旅行がさせてやりたかつたからですよ。こうして汽車に乗つて居りますと、その時のことを思い出してなりません。やっぱり、今日のように、この絵を窓に立てかけて、兄や兄の恋人に、外の景色を見せてやったのですからね。兄はどんなにか仕合せでございましたろう。娘の方でも、兄のこれ程の真心を、どうしていやに思いましたろう。二人は本当の新婚者の様に、恥かし相に顔を赤らめながら、お互の肌と肌とを触れ合つて、さもむつまじく、尽きぬ睦むつごと言を語り合つたものでございますよ。

その後、父は東京の商売をたたみ、富山とやま近くの故郷へ引込みま

したので、それにつれて、私もずっとそこに住んで居りますが、あれからもう三十年の余になりますので、久々で兄にも変った東京が見せてやり度いと思ひましてね、こうして兄と一緒に旅をしている訳でございますよ。

ところが、あなた、悲しいことには、娘の方は、いくら生きているとは云え、元々人の拵えたものですから、年をとるということがありませんけれど、兄の方は、押絵になつても、それは無理やりに形を変えたままで、根が寿命のある人間のことですから、私達と同じ様に年をとつて参ります。御覧下さいまし、二十五歳の美少年であつた兄が、もうあの様に白髪になつて、顔には醜い皺が寄つてしまいました。兄の身にとっては、どんなにか悲しい

ことでございましょう。相手の娘はいつまでも若くて美しいのに、自分ばかりが汚く老込んで行くのですもの。恐ろしいことです。兄は悲しげな顔をして居ります。数年以前から、いつもあんな苦し相な顔をして居ります。それを思うと、私は兄が気の毒で仕しよう様がないのでございますよ」

老人は暗然として押絵の中の老人を見やつていたが、やがて、ふと気がついた様に、

「アア、飛んだ長話を致しました。併し、あなたは分つて下さいましたでしょうね。外の人達の様子に、私を氣違いだとはおつしやはなしがいいりませんかでしょうね。アア、それで私も話はな甲斐があつたと申すものですよ。どれ、兄さん達もくたびれたでしょう。それに、あ

なた方を前に置いて、あんな話をしましたので、さぞかし恥かしがっておいででしょう。では、今やすませて上げますよ」

と云いながら、押絵の額を、ソツと黒い風呂敷に包むのであった。その刹那、私の気のせいであつたのか、押絵の人形達の顔が、少しくずれて、一寸恥かし相に、唇の隅で、私に挨拶の微笑を送つた様に見えたのである。老人はそれきり黙り込んでしまった。私も黙っていた。汽車は相も変わらず、ゴトンゴトンと鈍い音を立てて、闇の中を走っていた。

十分ばかりそうしていると、車輪の音がのろくなって、窓の外にチラチラと、二つ三つの燈火あかりが見え、汽車は、どことも知れぬ山間の小駅に停車した。駅員がたった一人、ぽつつりと、プラッ

トフォームに立っているのが見えた。

「ではお先へ、私は一晩ここの親戚へ泊りますので」

老人は額の包みを抱かかえてヒョイと立上り、そんな挨拶を残して、

車の外へ出て行ったが、窓から見ていると、細長い老人のうしろす後

姿はがた（それが何と押絵の老人そのままの姿であったか）簡略な

柵の所で、駅員に切符を渡したかを見ると、そのまま、背後の闇の中へ溶け込む様に消えて行ったのである。



# 青空文庫情報

底本：「江戸川乱歩全集 第5巻 押絵と旅する男」光文社文庫、  
光文社

2005（平成17）年1月20日初版1刷発行

底本の親本：「江戸川乱歩全集 第三巻」平凡社

1932（昭和7）年1月

初出：「新青年」博文館

1929（昭和4）年6月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：砂場清隆

校正：門田裕志

2016年1月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 押絵と旅する男

江戸川乱歩

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>